

ケニア・ルオの

居住形態の変遷

椎野若菜

1 ルオの「ダラ」とオティエノ事件

西ケニア・ヴィクトリア湖畔に居住地をもつルオは、ケニアで三番目に大きな民族集団である。ルオの暮らす居住空間は、「ダラ」とよばれている。このダラという言葉は、たんに居住区域、コンパウンドとしてのスペースを意味するだけではなく、ルオ人にとって儀礼的意味をもっている。また、その空間に居住する拡大家族の単位をも指す多義的な言葉である（学術用語としての「コンパウンド」の概念は、拙稿『「コンパウンド」と『カンポン』——居住に関する人類学用語の歴史的考察——』（『社会人類学年報』26 近刊）を参照）。

ルオ社会は父系の理念にもとづいた分節リネージ体系で一夫多妻の結婚形態をとっており、ルオ人はかならず自分の属するダラ（コンパウンド）をもっている。現在、彼らが暮らすコンパウンドを占める最小の居住集団の構成員は基本的に2、3世代からなる拡大家族で、これもダラとよばれる。コンパウンド内で行なわれる家内的活動は、常にその長によって決定され、把握されているこ

とが前提になっている。コンパウンドは、長を中心にした空間利用の規定、序列（seniority）とセクシュアリティに関連した慣習によって秩序が保たれている。したがって、結婚後もまだ父のコンパウンドにいる息子は、はやく自分のコンパウンドを築きたいと願っている。コミュニティ内においても、ルオの男性は結婚して息子をもち自分のダラを建てると、一人前のルオとして人びとに認知されるようになる。

このダラ建設の手続きは父親の立ち会いののもとで、次のように儀礼的に行なわれる。夜明け前、父をとめない妻と長男とともにダラ建設の候補地にむけて、今いる父のダラを出発する。宗教的意味のある野草や斧や臼、オンドリを携えてゆく。そして父がダラ建設に適した場所を息子に指し示すと、息子はそこにオンドリをつなぎ止め、家屋の入り口になる場所に火をおこす。そして、家屋を建てるための初めの穴を息子が掘ることで建設がはじまる。家屋が完成するとオンドリを殺し、親族や近所の人を招いて共食し、新しいダラ所有の祝宴と認知がなされる。それ以後、息子にとっては近所のマーケットにでかけようが、町に出稼

ぎに行こうが、「帰る」場所は彼のガラとなる。そして死ぬのも埋葬されるのも、ガラ内のしかるべき場所である。

1986年にナイロビで亡くなったルオ人弁護士、S・M・オティエノの埋葬場所をめぐる裁判がなされたことは、ケニアではよく知られている。その争点のひとつは、「ホーム」対「ハウス」論争であった。オティエノはナイロビで活躍した弁護士であり、キクユ人の妻と結婚し、ナイロビに家庭と農園をもっていた。裁判では、彼のナイロビでの居住地が「ホーム」、すなわちルオにとっての「ガラ」に相当するかどうかという論議が噴出した。ナイロビに建てたのは彼の「ホーム」であり、そこに埋葬したいというキクユ人の妻の主張に対し、ルオ人であるオティエノの父系親族側は、ナイロビの婚舎は儀礼的手続きをとらずに建てられたので「ホーム」とはいえず、一時的に居留する「ハウス」であり、オティエノは出身地であるルオ人居住地に埋葬されねばならないと主張した。

私の調査している村で行なったイギリス植民地化前後の居住形態についての聞き取りの内容と、オティエノ父系親族らの「ガラ」に関する主張の前提にある居住形態とを比べてみると、両者の間には時間的な形態上の不連続が感じられ、その変遷を追うことができる。本稿では、オティエノ事件で主張された、遺体が帰る場としての「ガラ」概念が創出された歴史的背景の一端を、居住形態の変遷を追うことで提示したい。

2 村の形成史と居住形態の変遷

前述のように、「ガラ」という言葉は、(1)囲まれた物理的居住空間の意味、(2)そこを占有する居住集団の意味、(3)オティエノ事件で語られたよう

な、帰るべき「伝統的」居住空間、という儀礼的意味をも含んでいる。(1)の居住空間をさすガラに対して本文では「コンパウンド」をもちいることにする。(2)の意味では、ガラは変遷過程で現れた大小の拡大家族に対して適用されてきた。(3)の意味については本稿では詳しく追うことはできないが、植民地化以後、他民族との政治的関係のなかで強調されるようになったと考えられる。

私が調査対象としている村落はニャンザ州ホマベイ県にあり、ヴィクトリア湖畔から南東約20キロ内陸に入ったところに位置している。既婚男性を世帯主とすると、村は現在105世帯からなっている。居住単位であるコンパウンドは81あり、ヴィクトリア湖へそそぐ川にむかったゆるやかな斜面に点在している。

ユーフォービアやグアバなどのブッシュ、あるいはそのほかの低木で囲まれたサークル状の生垣コンパウンドが散在している、というのが現在のルオの典型的な村の景観である。しかし調査村内に残る居住跡をみれば、そこに暮らしていた人びとの集団や村の景観が今とは異なっていたことが一目瞭然である。村には石垣で囲まれたコンパウンド（村ではオインガとよばれている）が残っており、年輩の村人に話をきけば、そのなかで生まれ、幼少期まで育った人もいるのである。現在の村落の母体であったひとつの大型石垣コンパウンドのほか、村内には10の小型石垣コンパウンドの存在が確認できた。つまり1世紀に満たない間に、村落の景観は大きく変化しているのである。具体的にみてみよう。

80歳位の村の老人たちに系譜や人びとの移動について聞いてみると、村を創始した人物はルオの始祖から14代目に位置し、老人たち自身は17代目にあたることがわかる。このことから、この村はウガンダ方面より徐々に移動してきた人びとが定

着したことにより、19世紀半ば頃にその基礎ができたと考えられる。当時は近辺に野獣が多く、またクラン間での戦争も絶えなかったため、この地に移住してきた当初、彼らは防衛のために小さな石垣コンパウンドを築き、囲いの中に入りきれない家族はその周辺に接するように暮らしていた。のちに、もっと大きな石垣コンパウンドにまえから住んでいた人びと（ルオの他クランやマサイなど異説がある）を追出し、そこへ移動したという。

現在、村に残っている最大の石垣コンパウンドは、石垣壁のもっとも高いところで3メートル弱あり、横は約130メートル、縦は約200メートルの広がりのある空間をつくりだしている。さらにその内部に仕切りとなる壁が築かれており、まさに小型コンパウンドの集合体である。

それでは、現在の村のプロトタイプであった大型石垣コンパウンドの中に暮らしていた人びとの構成はどうだったろうか。

伝承によれば、現在の村の人びとの祖先がこの地に着いた頃には、大型の石垣コンパウンドはすでに存在していたようだ。人びとは移動してくると、一人の男を長とする拡大家族が大型コンパウンド内の仕切られたそれぞれの区画で暮らすことを基本にした。リーダーであったオムシという名の男が中央の一番広い場所を占めていたが、必要に応じて大きな枠組みのなかにまた、仕切りの壁を築いていった。それぞれの区画内にはさらに小さな石垣の囲いが牛のためにつくられており、当時の牛は二重、三重の石垣で囲まれた空間で飼われていたことになる。

このコンパウンド全体は、リーダーを中心にする拡大家族の区画、彼の息子の家族の区画、彼の兄の息子たちの家族の区画、彼の姻族の区画、などから構成されていた。他クランである姻族やリーダーと友人関係にある家族もコンパウンド内に入

れたことから、このコンパウンドは「マニユアング・オインガ」と呼ばれるようになった。「マニユアング」はさまざまな人びとが集まっている、の意である（図：第1期）。

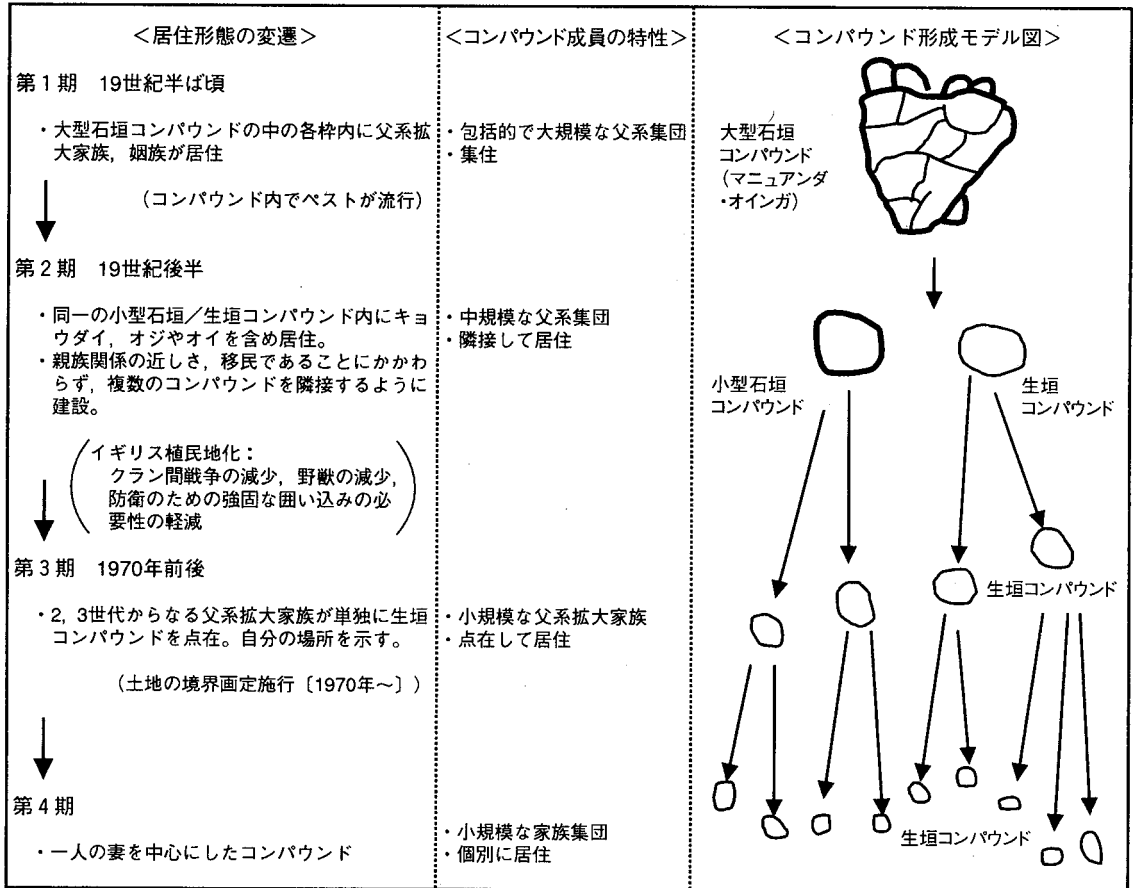
大型コンパウンド内で息子が結婚し子供をもち、ひとつの区画内の人口が増えると、息子は父親の区画からでる必要が生じた。そこで、区画の内側に新たな区切りを築くか、あるいはコンパウンドの外壁を使って新たなコンパウンドを付け足すことにより、自分の区画をつくっていった。またある者は、さきに独立して自分の石垣コンパウンドを築いていたオジやキョウダイをたよって出ていった。コンパウンド全体の形のいびつさから、こうした増築の過程は容易に想像することができる。

3 石垣から生垣コンパウンドへ

やがて19世紀後半になると、この大型の石垣コンパウンドではベストが流行し、リーダーもそれに罹り、全員がそこを出た。この大型石垣コンパウンドでの生活は、ここで終止符をうたれることになった。大型の石垣コンパウンドから住人が分散しはじめた頃、キスム方面から新たな移民の一波がきて、その一部がこの土地に落ち着いた。彼らもまた自分たちの石垣コンパウンドを形成し、そのなかで暮らしはじめた。移民である彼らは寛容であり、なんらかの理由で自分のコンパウンドに住みづらくなったリーダーの子孫などと共同して、野獣や外敵から身を守るために隣り合ってコンパウンドを築いた。これは、中規模な父系集団がひとつの居住空間としてコンパウンドを形成し、それらが隣接しあってコンパウンド集合体をつくった時代だといえる（図：第2期）。

このころになると、イギリス植民地政策により他クランとの戦争も激減し、野獣の数も格段に減っ

19世紀以降のルオの居住形態の変遷



た。防衛のために建設されていた石垣の必要性も同時に減少し、石垣コンパウンド内での居住をやめる人びとがでてきた。防衛のためには、隣接して暮らす、石垣をつくる、という方法があったが、外部環境の変化とともに居住形態も徐々に変わったのである。この時代には、石垣コンパウンドとブッシュや低木で囲まれた生垣コンパウンドが混在していたと思われる。当時、人びとはまだ流動的だったが、土地の境界画定 (Land Demarcation) の実施のうわさをきき、自分の場所を示すために村にもどってくる人びともいた。逆に、自分の土

地を指定されるまえに姻族をたよって他クランからこの村に移り住む人もいた (図：第3期)。

この調査村における土地の境界画定の実施は1970年代であった。土地の境界線が引かれた後、人びとの定住化は進み、土地所有についての観念が強まっていった。たとえばその現れとして、一夫多妻の大家族がひとつのコンパウンドを築くというのがそれまでの慣行だったが、近年は夫がそれぞれの妻のためにコンパウンドを建設する傾向が出てきた。90年代に入り、他クランからこの村に新たにきた移民も同じ形態をとっている。彼

らはより肥沃な土地をもとめて、あるいは若い妻のためにコンパウンドを建てる土地をもとめて移住してきているのである。現在、村落内に81あるコンパウンド中、22 (27%) が重複した長 (つまり複妻をもつ夫) のもとにある。いいかえれば、一人のコンパウンドの長は、約1個半のコンパウンドを所有している計算になる (図: 第4期)。

それぞれの妻のためにコンパウンドを築くというのは、同一コンパウンド内での僚妻同士のトラブルを防ぐ有効な手だてともいえる。先にも触れたように、コンパウンド内は序列に基づいた慣習的規定が既婚者に適用されるため、既婚者が少ないほどもめごともないことになる。一夫多妻を単位とするコンパウンドの場合、人びとは慣習的規定の違反に対する超自然的制裁を恐れ、またコンパウンド内のもめごとを解決するために、兄やオジのコンパウンドへ一時的に避難する、という手段をとってきた。しかし、近年そうした事例は減少し、一時的に近隣の小さな町の借家を借りるという人もでてきている。この現象の背景には、一夫一婦婚や西洋的な家屋建設などといった新しい考えや実践の影響もあるのかもしれない。

4 まとめ

これまでみてきたように、南ニャンザのルオラ

ンドでは、居住形態が19世紀後半には大型石垣コンパウンドから小型石垣コンパウンドに変遷した。1970年代、土地の境界画定が実施されたころから石垣コンパウンドは見られなくなり、人びとは大家族ごとに生垣コンパウンドを建設するようになった。そして次に、大家族を基本とする居住単位も、妻ごとにコンパウンドを建てるという個別化が徐々にみられるようになってきている。主流であった一夫多妻の大家族のコンパウンドが「ガラ」といわれてきたことは冒頭にもふれたが、こうした近年の妻ごとの小さなコンパウンドもまた、「ガラ」と呼ばれているのである。

オティエノ事件に代表される、「ガラ (コンパウンド) とはルオ人が生まれ、死ぬところである」というコンパウンドへの執着心と信念は、現代ルオにとって民族アイデンティティの大きな要素のひとつとなっている。ルオ人にとってのS・M・オティエノ事件の意味は、「ガラ」への信念がルオ人たるべき条件として一層強化された点にあったと思われる。しかしこれも、植民地化から土地の境界画定がおこなわれた時代にかけての居住形態の変遷のなかで、ここ100年のあいだに生成されたものだと考えられるのである。

(しいの・わかな/東京都立大学大学院)